

2006 年度寧波調査ノート

松田吉郎

2006 年 9 月 25 日から 10 月 1 日にかけて、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生—」（領域代表：東京大学小島毅氏）の「寧波地域の水利開発と環境班」は第三回目の寧波調査を行った。

参加者は筆者（兵庫教育大学）、本田治先生（立命館大学）、南埜猛先生（兵庫教育大学）、上谷浩一先生（大阪体育大学）の 4 名であった。

以下、寧波調査の概要を日程毎に説明しよう。

9 月 25 日（月）

午後 11 時、寧波空港に到着した。通訳の谷瑛瑛さんと友人の運転手の仇学功さんが出迎えてくれた。

春天賓館に投宿し、谷さんと調査日程を打ち合わせた。26 日には北侖の王安石関係の水利施設を見学し、27 日には烏金硯調査、28 日には餘姚市の水利施設、朱舜水記念館参観を決める。

9 月 26 日（火）

午前には北侖の穿山硯を調査した。硯夫が出てこられ、説明を受ける。蘆江にある硯で現在のものは 1953 年に作られたものである。ただ、王安石時代の硯も同じ場所にあったとのことである。現在は硯夫 2 人で管理している。江の水が増水し、水位が 2m75 cm 以上になれば水門を開き、水を海に流す。硯内にはいくつか水門があり、すべて電動油圧式で開閉される装置であった。水門を開閉するのはすべて寧波市水利局の指示に従って行われる。現在は江の水は殆ど流れておらず水質が悪く、水が流動すれば水質はよくなると言われていた。しかし、その江の水を使って農婦が洗い物をしており、また、農夫が小舟を移動しているのが見えた。

その後、新路水庫を訪問した。ロックフィルダムでまだ工事中で 2006 年末に完成予定である。石は付近の山から切り出しているようで、そのように見える場所があった。このダムで魚釣りをする場合は一人 10 元であり、何人か魚釣りをしていた。ダムの側面に洪水時排水路があり、ダム本体からの水門はないようである。ダムから下流を見たが、野菜に混じって盆栽の栽培が行われていた。

そして、石湫の王公塘を訪問した。現在は建物があり、水は流れているが、元々のものは残っていない。

午後は鎮海県の鎮海口海防遺址を訪ねた。道光 21 年（1941）製造の大砲 3 門あり、その傍らの中法戦争鎮海之役勝利記念碑を見た。その付近には大砲が 3 門あり、2 門は道光 21 年製、もうひとつは道光 22 年（1842）製とあった。

そして歴史博物館を参観した。

9 月 27 日（水）

午前 8 時 30 分にホテルを出発して、烏金硯（上水硯）に向かうが道がわからず、一旦、它山堰に行く。通訳の谷さんが烏金硯への道を聞いている間に、我々は它山堰を見学した。堰の下へ降りてみると、潮の香りがした。2005 年 12 月に訪問した際、繆復元さん（鄞州区水利局）がここまで海水があがってきますよとおっしゃっていたが、それを実感した。さらに迴沙閘、它山堰引洪橋、樟溪、光溪を参観する。它山堰廟を参観したが、その所の長の陳思光氏が它山堰関係資料を提供してくれた。周静書主編『鄞縣名勝古跡』（黄山書社、1998 年 1 月）、陳思光編著『全国重点文物保護單位 它山堰（唐代）』（鄞県鄞江人民政府、2000 年 12 月）、陳思光編著『歴史名鎮 鄞江橋 地方古掌参考資料』発行年月日不詳、陳思光編著『歴史名鎮 鄞江橋 続編 鄞江山水 鍾靈毓秀』2003 年 8 月を戴いた。また、陳氏が日本の学者で鄞県に詳しい研究をした者がいるとおっしゃって、『佐藤博士還暦記念中国水利史論集』（国書刊行会、1981 年）と森田明編『中国水利史の研究』（国書刊行会、1995 年）を出された時には、本田治先生ともどもびっくりした。どうして手に入れたかと問うと、日本から送られてきたものだとおっしゃっていた。私事で恐縮であるが、25 年前に書いた拙論「明清時代浙江鄞県の水利事業」（『佐藤博士還暦記念中国水利史論集』所収）が它山堰廟の所長に読まれていたとは、意外さと恐縮を感じた次第である。

その後、烏金硯（上水硯）に向かう。午前 11 時過ぎに同地に漸く到着した。3 月にお会いした盛小毛氏に再会した。彼は 1926 年 2 月 5 日生まれ、現在 81 歳、住所は寧波市鄞州区洞橋鎮上水村である。1940 年から烏金硯の硯夫をしている。彼の家で聞き取り調査をした。彼の父親は現在の住所の半 km ほど離れた所に住んでいたが、現在地に引越ししてきた。父の時代は貧しく他人から食物をもらって生活していたと言われ、日雇い或いは長期の雇い農夫であったかと思われる。彼の父は硯夫ではなく、当時は烏金廟の僧侶が硯の管理を行っていた。盛氏がおっしゃるには僧侶は廟に終始おり、外にあまり出かけないからであるとのことである。1940 年から盛氏が硯夫となる。これは硯の近くに住んでいたため村長が無給で担当してくれ、硯の近くのものを探しており、盛氏になったということである。

盛氏は小作農であり、地主より 15 畝の土地を借りていた。地主の姓名は忘れたとの事である。生活は困難であった。「田底」（土地所有権）と「田面」（耕作権）の区別があった。小作料は 1 畝当たり年 80 kg の米であった。小作料を納入すれば小作権は維持保証された。しかし、1 年でも滞納すると小作権は取り上げられた。小作契約は口頭契約である。このあたりの作物は米が中心で 1 年 2 期作である。4 月に植え、7 月に収穫し、収穫後 1 週間ほどしてからまた植え、10 月末に収穫した。1 畝あたりの収穫量は 150 kg である。小作料は収穫量の約 53% であった。米の値段は 1949 年以降は 1 斤（500g）1 角 3 分（0.13 元）であった。他には枝豆、じゃが芋、里芋を田の先端部に植えた。これは自家消費で、地主に小作料として納めるものではなかった。冬には緑肥、レンゲを植え、田の肥料としていた。肥料には豚や鶏の糞も用いられたが、金肥は用いなかった。水牛が黄牛を 1 頭飼い、これは自家所有物であり、耕作に用いた。さらに豚、家鴨、鶏も飼い、これは正月の食糧であった。これらの家畜を小作料として出すことは無かった。特別の副業は無かったが、

稲収穫後に藁を編んで畳を作り売った。借金はしたくてもできなかった。「救会」と呼ばれる頼母子講はあり、何人か集まって行った。政府への納税はなく、土地の登記もしなかったと言われる。これらのことはおそらくは地主がやったのであろう。

この村は上水碶村と呼ばれたが自然村である。80 家ぐらいいた。土地所有農家は地主 2 家、富農 1 家で、他の 70 数家は小作農であった。雑姓村であり、村内には親戚があった。村民集会というものはなかった。村長がいたが、彼は畳を編む一般農民であった。村には規約はなく、同族に規約があった。盛家の族長が決め、口で通達し、文献は残っていない。村には公有財産はなかった。共同の活動（帮工、排澗、堤防修築、挖河、廟会、保衛など）もなかった。南塘河沿いに土手があったこれ石契という。石契が崩落した場合は、その河に面している農民が自分で修理した。濱島敦俊氏の言われる田頭制であり、筆者は拙論「明清時代浙江鄞県の水利事業」で文献上でも確認した。2004 年に政府が資金を出し、堤防にした。現在の修築は水利局が行っている。従って、少なくとも明清時代以降最近まで田頭制が続いていたことになり、長江下流圩田地帯における明末清初における「田頭制」（クリークに面している戸が面している部分の堤防修理、クリークの浚渫を行う仕方）から「照田派役制」（農民が土地所有面積に応じて堤防修理費や浚渫費を出したり、或いは労働力を出すやり方）のような変化はなかった。これは鄞州地域が地理的に江南圩田地域とは異なっていることが原因であると考えられる。

河の浚渫については以前は行われなかった。現在は水利局によって何年かに 1 回行われている。水利組織は存在しない。水が不足した場合、農民が訴える場所はなく、また水争いもなかった。現在は水利局に訴えれば水庫（ダム）から供給してくれる。1949 年前から鄞県水利局があり、その下に鄞県西郷水利協会があった。水利局の一部門であり、農民は参加していない。水利局の一部局が烏金碶を管理していた。水利局が碶司であった。水が足りないときや洪水時において、何時、水門を開くかを決定した。普通の場合は碶夫の盛氏が隣の古林鎮の水の状況を見て、碶の水門の開閉の判断を行った。水位は烏金碶に木の家鴨を浮かべて水位を判断するか、烏金碶傍らに水面に到達する階段があり、どの階段まで増水すれば開閉すると決めていた。この階段は船着場ともなり、農婦の洗濯場所でもある。

烏金碶の役割は稲栽培用の灌漑用水の調節である。大水の場合は奉化江に水を流した。碶の修理は水利局が行った。

農民が南塘河の水を田に入れるには、1949 年前は竜滑車を用いた。1960 年代以降は、船にディーゼルエンジンのポンプを載せ、給水した。その 3 年ほど後、電動ポンプで給水するようになった。これらはすべて農民の個人所有物である。南塘河から離れた田には田と田の間に水路を作り、そこにポンプで水を流した。その水路は公有物である。このあたりでは井戸水灌漑はなく南塘河の水を使っている。

1957 年に大旱魃があり、米の収穫量は 0 となった。生活用水は奉化江に船を浮かべて用いた。田に枝豆、里芋を植えて食いつないでいた。

解放後の土地改革で盛氏は自作農になった。3 畝半の土地が与えられた。米の収穫量は

1 畝あたり年 400～500 kg となり、生活は楽になった。盛氏のあと誰が硯夫になるか不明である。硯夫の給料は 1940 年から 49 年までは全く無く、1949 年以降は 1 年 120 元、現在は 1 年 200 元という薄給である。この薄給でも盛氏が硯夫を引き受けたのは硯に近い家であるということもあるが、貧農として僅かな収入も確保したかったのであろうと推測される。

現在、農民は少なくなり、1 人で 20～100 畝の土地をもっている者もいる。これらの土地は他の農民から貸与され農業を委託されたものである。米の生産が中心であるが、10 年前から藺草を栽培し売っている。因みに通訳の谷瑛瑛さんは寧波天韻農業開発有限公司・寧波天韻草芸有限公司という貿易会社にお勤めであるが、寧波藺草の日本輸出部門担当である。

洞橋鎮には上水硯村など 20 村が所属している。

水利慣行は明清時代以降解放後も基本的には変化せず。水利局がいつできたか不明であるが、おそらくは盛氏が硯夫となった 1940 年以降は既に存在し、水利局の管轄の下に、硯夫によって烏金硯が管理されていた。1949 年以降、水利局が旱魃時に水庫の水を供給したり、堤防の修築を行ってすることであった。以前は土手の修理は「田頭制」によって農民が自分で行っていたが、現在は水利局が堤防を修築しその管理も行っている。

水利組織は存在せず、水利局、硯夫の管理による水利灌漑が行われていたことが明らかとなった。

その後、付近の烏金廟を訪問した。設立年代は不明であるが、1940 年に盛小毛氏が硯夫になる前は同廟の僧侶が烏金硯の管理をやっていたというから同時期には存在していた。中には正面に它山堰の修築に関係した蔡氏と女性の像、左手に白馬の手綱を取った王元暉の像が祭られていた。

昼から月湖を参観する。ここは南宋時代に史浩が龍舟を行った場所と言われる。筆者等も電動ボートに乗り、水の娯楽気分を味わった。

その後、旧日湖を参観するが、現在、湖はなく、家屋が立ち並んでいた。旧日湖付近に日湖遺址の碑文があり、参観する。その後ろは大きな井戸と思いきや、運転手の仇学功さん（50 歳）によると日中戦争時の防空壕であったとのことである。

9 月 28 日（木）

午前中に餘姚市に出かける。竜山公園の竜泉山に登り、王陽明、朱舜水、黄宗羲（以上明代）、高士巖子陵（漢代）の 4 賢人の碑を見る。その後、餘姚博物館を参観し、通濟橋・舜江樓（宋代）を見て、通濟橋には登ってみた。その橋の下を流れるのは餘姚江で、隋以来の大運河であった。昔は船が大いに往來したが、今は遊覧船が往來するのみであるという。餘姚江沿岸には柳が植えられ、木陰となり人々の憩いの場となっている。

そして、朱舜水記念館を参観する。中に展示されていた書物は翁志鵬「朱舜水在日本」『杭州大学学报 哲学社会科学版』第 25 卷第 4 期、1995 年 12 月、朱力行『朱舜水的一生』世界書局、1982 年、餘姚市郷賢研究会編『餘姚郷賢論』（餘姚市郷賢研究会論文集）第 1 輯、第 2 輯、『常陸評論』、『舜水遺書』、古亭書屋、1969 年、『光緒餘姚朱氏宗譜』で

あったが、購入できる書籍は置いてなかった。

午後 2 時前に餘姚市水利局を訪問したが、局長より日本人には会えないと断られた。谷瑛瑛さんのご尊父に依頼し水利局局長のご友人にあらかじめ内諾を得ていたにもかかわらず、面会を拒絶された。2006 年 6 月頃から中国政府は寧波市、水利局に日本人研究者を受け入れないようにとの通達を出しており、その影響かと思われる。

その後、慈溪県に行き海塘を見学する。谷瑛瑛さんの親戚の張さんを訪問した。張さんの住まいは愈家路 23 である。七塘（約 100 年前建設）は道路になっており、両側は水路である。八塘、九塘は各々 30 数年前に建設され、やはり道路となっており、八塘、九塘付近は元々塩田であった。現代は使われていない。むしろ、観光客用のコテージが建てられており、2008 年開通の上海—寧波間的高速道路から来る客を目当ての建設と言われている。海浜部に面して十塘が 2002 年に作られていた。ここは錢塘江口の杭州湾にあたり、はるか彼方に対岸の乍浦あたりが見えた。上海—寧波の高速道路は錢塘江・杭州湾を横断する橋が建設されていた。世界最長と言われている。

9 月 29 日（金）

東錢湖を訪問する。最初は東錢湖公園に入る、入場料と駐車料金を払うが、すぐに別の場所に移動する。ここは東錢湖の西側ほぼ中ほどの位置にある。すぐ傍の平水橋を見る。堤であり、東錢湖が増水すれば水が水路に入るもので、小舟を引き上げて水路と東錢湖との往来ができる構造である。本田治先生のお話ではここに水測碑があったのではないかとのことである。そこから東錢湖を南にくぐる。水郷で水路では農婦が洗濯をしていた。そして東錢湖西側のほぼ真ん中にある陶公山の麓の公園に入り湖心塘を見る。ここは 3 月にも訪れ、その時は湖が霞んでいて湖心塘を見ることができなかったために水利局が船を出してくれて湖心塘を遊覧したところである。今日はよく晴れていて湖心塘はくっきりと見えた。この公園には東錢湖の遊覧船が繫留されていた。今日は平日で客はほとんどなく我々に乗船せよと客引きをしていたが、時間が無く乗らなかった。そこから東錢湖東側の上水村へ行く。ここは村人が立ち退きになったようで廃村であった。湖に面した少し高台に管理事務所のようなところがあり、そこから対岸の陶公山、その南側にある高湫塘を見る。高湫塘低い塘であった。その後、上水村に南に流れ東錢湖に入っている上水溪を見る。橋があるだけで、堤がなかった。その後東錢湖をまた元の東錢湖公園に戻ったが、湖面沿岸が整備され、別荘などが建ち、リゾート地化していた。

午前 11 時 30 分に寧波大学賓館に到着する。ここで同大学外国語学院の楊建華先生に会う。楊先生は我々の寧波プロジェクトの受け入れ教員であり、寧波プロジェクトの調査班の調査活動における問題点について意見交換した。席上、筆者が今回は 3 月同様、鄞州区水利局に調査の協力を願ったが、6 月頃に同水利局の繆復元が北京の水利水電科学研究院の譚徐明先生を通じて協力できない旨の連絡があり、譚先生に問い合わせた所、ここ 1、2 年寧波、新疆ウイグル自治区に日本人研究者が多く訪れ、現地は当惑し、中国政府に対応を打診した所、中国政府から現地の機関に日本人研究者の受け入れをしないようにと通達

してきたために、鄞州区水利局は我々の受け入れを断ったものであるとのことであった。また、前日の9月28日に余姚市水利局も訪問したが日本人研究者というだけで受け入れを断ったことをお話した。

楊建華先生は我々は調査におけるこのように問題はあまり聞いておらない。ただ、最近、寧波大学に考古学の研究者が考古調査をした際に、当局よりクレームがついたことを聞いたとのことであった。

水利の調査について楊建華先生は専門外であり、我々が個人的なつながりで調査してもらうしか方法がないとのことであった。

寧波の郷土史研究については、各部門で行っている。余姚市の王書記は朱舜水研究を行っている、『浙東文化』の浙東文化研究所は寧波大学の研究者が責任者となっている、東錢湖の南宋石刻公園に史氏の石刻があり、付近の史氏の墓にも残っており、東錢湖文物所主任の謝さんが史氏の石刻に詳しいとのことであった。その後、寧波大学図書館の資料をコピーした。同図書館で目に付いた書物は『寧波市地名志』寧波地名委員会、1993年、『寧波市行政区画沿革』寧波市档案馆、寧波市城建档案馆、寧波市地名委員会室、1994年、『鄞県年鑑（1990年）』鄞県地方誌編纂委員会、『鄞州年鑑（2005）』総第19冊、中共寧波市鄞州区委党史弁公室編、方志出版社、『寧波市基本単位大全（2003）』寧波市統計局編、中国統計出版社、『水庫移民工作手冊』中華人民共和国水利部編、新華出版社、『寧波詞典』復旦大学出版社、1992年である。

その後、横街で藤嶺水庫を見学した。1956年に建設が始まり、1960年に竣工した。人民公社時代、付近の数村が共同で作ったロックフィルダムであり、水庫付近の山から採石して作られたものと思われる。水庫岸には魚釣り客用のバンガローが何軒か建てられていてリゾート化しているが、お客が見当たらず、あまり成功しそうにないという印象であった。

9月30日（土）

午前には慈溪県に出かけた。県の東から水庫を見学した。まず鳳浦湖を見学した。岸は岩片が嵌められていた。ここは飲用水の水庫と書かれていたが、水はあまりきれいではなかった。どこかで浄水しているのであろう。当日は水利局の管轄下で行われていたと思われるが、浚渫船が湖上で泥を浚渫し、浚渫後、浚渫船が岸壁沿いのサルベージ船に接着し、同サルベージ船が泥を掬い上げて岸の外に出していた。

その西にある窰湖を見学する。堤防はセメントで補強されていた。

そして杜湖を見る。この杜湖と白洋湖は慈溪県出身で神戸の華僑呉錦堂が清末に改修したところである。既に、森田明先生に論文がある（同著「呉錦堂と杜湖・白洋湖の水利事業」『東方学会創立四十周年記念東方学論集』1987年）。杜湖は上流から裏杜湖水庫と外杜湖水庫に分かれている。その境界にロックフィルダムの堤防があり、堤防の西端に杜湖水庫管理所があった。飲用水源保護区と書かれていた。外杜湖水庫には浚渫船が6～7隻出て泥の浚渫を行っていた。裏杜湖水庫の東岸沿いには煉瓦工場、寺廟、土地公があった。外杜湖水庫の北端には堤防があり、水門もあった。その後、白洋湖を訪問した。ここも呉錦

堂が改修した水庫であり、傍らに呉錦堂墓園があった。大きな敷地に墓が祭られていた。その横に澤郷亭があり、陳徳仁氏（同氏・安井三吉著『孫文と神戸』神戸新聞総合センター、1989年において呉錦堂氏と孫文の係りを語っている）が記した呉錦堂顕彰の碑文があった。杜湖は白洋湖よりかなり小さい湖でまわりに昔からの農村の佇まいを残していた。湖の岸壁にお寺があり、そこには湖遊覧のボートが繫留されていた。

その後、東山頭村の近くの錦堂村を訪問し、呉錦堂の故居を参観する。農村で洒落たレストランもなく、道幅も狭いところであった。故居の敷地は狭いが二階建てで一階の一室に呉錦堂の遺影が飾られていた。二階は七室ほどの居間があった。ここは以前、幼稚園に使われていたそうであるが、今は誰も住んでおらず、付近の人々が鍵を管理し訪問する人のために門を開閉していた。

午後3時頃に宿泊のホテルに一旦戻り、筆者は上谷氏と慶安会館の参観に出かけた。同会館発行の「簡介」によると、同会館は奉化江、餘姚江、甬江の合流の三江口東岸にあり、またの名を北号会館という。寧波港から北へ向かう舶商・航工の集まる所であり、娯楽と航運と行業と日常業務・議論を行う重要な場所であり、中国の七大会館の一つである。また、甬東天后宮と名づけられ、媽祖を祭る神殿があり、中国八大天后宮の一つで、浙江省で現存する最大規模の天后宮であるといわれている。道光30年（1850）に建てられ、敷地は8000㎡である。会館と祭祀の両方の機能を持ち、雙戲台（敬神、娯楽）を配置していた。一番に后殿があり、媽祖が祭られ、その前の安瀾会館は媽祖の伝承・歴史が壁に壁画として描かれ、また、映像で媽祖の歴史が映写されていた。媽祖は福建省莆田に生まれた林謙といわれ、航海の安全を守り、倭寇撃退に貢献し、清朝が1683年に台湾を領有するに到った際に活躍した施琅にも力添えをしたという媽祖の歴史叙述壁画であった。二階には媽祖の生活を示す寝室や居室の模型があった。

その後、奉化江沿いに南に行き、靈橋を渡った。ここは唐代から清代まで東津浮橋と呼ばれた浮橋であった（拙論「明清時代浙江鄞県の水利事業」参照）。現在の靈橋は柔構造のようで車の振動で揺れていた。靈橋から奉化江沿いを散策し、そして江寧橋を渡ってからホテルに戻った。

通訳の谷瑛瑛さんのお話によるとこの慶安会館は地元の商人よりも寧波に関係を持つ他地域の商人が運営しているものであるとのことであった。

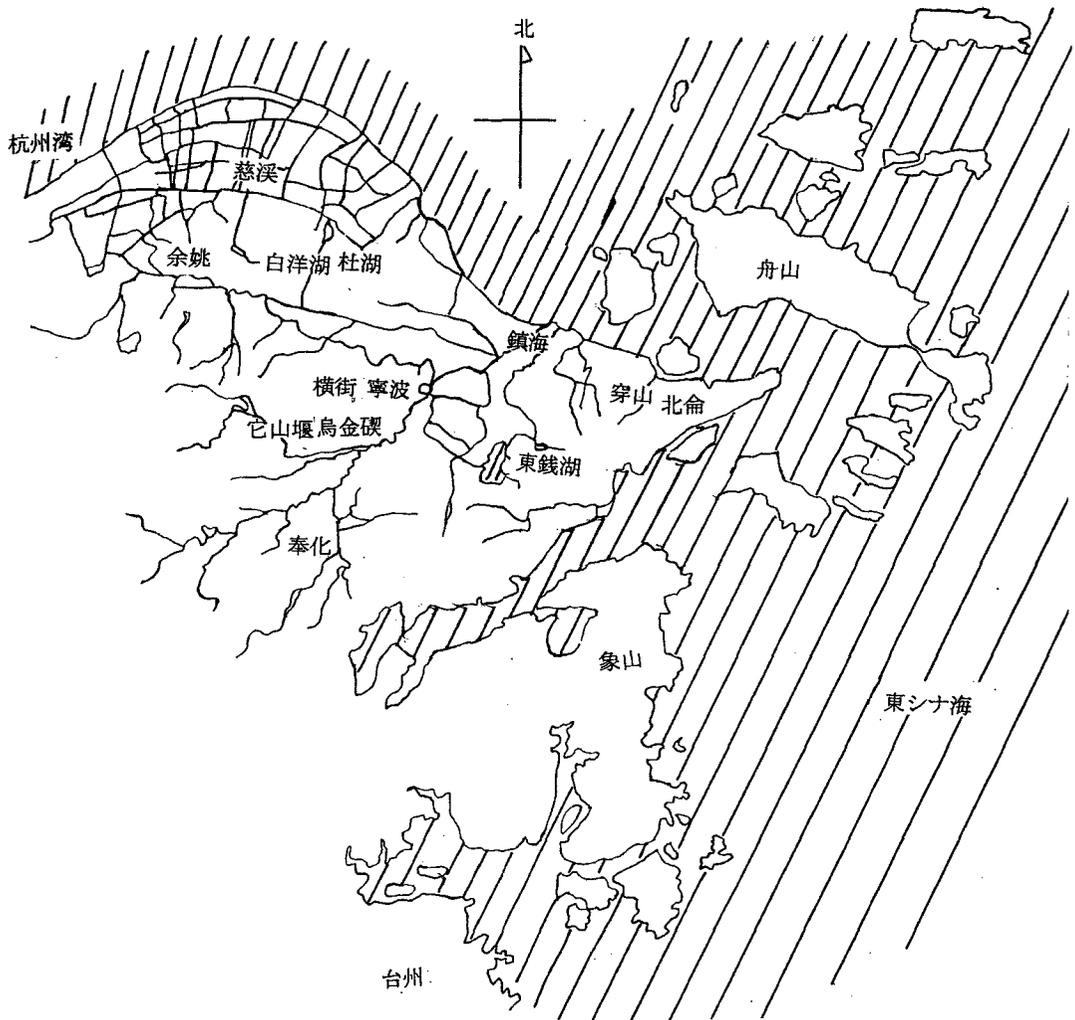
夕食を月湖付近でとり、食後、月湖を散策し、夜の水の娯楽を味わった。月湖の東北端にある水測碑を見、その後、城隍廟市場の繁華を見て、奉化江の琴橋を渡った。その付近に大石峩がある。3月にも参観したが宋代創建のもので、1999年に新建されたものである。東銭湖からの水がここで奉化江に合流する場所である。その後、同じく奉化江沿いを散策してホテルに戻った。

10月1日（日）

寧波空港から上海浦東空港をへて、関西空港へと4人無事に帰国した。
おわりに

今回の調査で最大の収穫は烏金碶（上水碶）の盛小毛氏に再会して、盛氏の小作農から自作農にいたる農業経営方法、碶による水管理方法等の聞き取り調査ができたことである。残念ながら、中国側の受け入れが整わず、他の碶の調査ができなかった。今後の調査の進展を期待したい。

第1図 寧波付近図



（『寧波市工商旅游図』浙江省測繪大隊編制 哈爾濱地図出版社、2005年9月より作成）